

### 1. 前事務局より

青山学院大学フランス文学科では 2012 年から 2015 年まで、事務局の業務を、2 人（鳥居とドルヌ）で担当しました。青山学院大学に事務局を置くのは、始めてでした。そのためでしょうか、最初は、あらゆる種類のミスがたくさんしたと思います。さらに、フランス語学会が使っているソフト（アクセス）と自分のコンピューターの相性が悪くて、スムーズに仕事ができるようになるまでには半年ぐらいかかりました。ドルヌが事務の仕事に向いていないことを、あらためて思い知らされました。しかし、学会が存在するかぎり、事務局なしではなにもできないので、自分がそれに向いているか向いていないかを考えずに、仕事を進めなければならなかったのです。

2 年目には、ドルヌが在外研究でパリに 1 年滞在しましたので、事務局が 2 カ国に置かれるというフランス語学会の歴史でも初めてのことでした。これも、インターネットの時代だからこそできたことでした。そして BELF に関しても、インターネットでバックナンバーにアクセスすることもできるようになっています。だとすれば、今まで事務局の移転につれて移動させていた、当会の最初のころから積み重なった荷物（現在、段ボールが 5 個）の一部を処分しようと考えています。

今年から、事務局の業務は早稲田大学に移ることになりました。引き継ぐのは、酒井さん、守田さんの若い 2 人ですから、元気いっぱい業務をしてくれると思います。どうぞよろしく願いいたします。

みなさま、ご迷惑をおかけしたこともあったかもしれませんが、なんとか無事に仕事を引き継ぐことができほっとしています。ありがとうございます。

(France Dhorne)

### ◆学会誌の電子アーカイブについて

『フランス語学研究』43 号以降の一般公開の遅れについてはニューズレターの前号 (22 号) でお知らせしましたが、その後は順調に公開が進み、現時点で公開可能な学会誌のバックナンバー (45 号まで) はすべて公開されています。国立情報学研究所 Nii が提供している論文情報ナビゲータ CiNii からアクセスできますのでご利用ください。

なお、同研究所電子図書館による電子化事業は近く終了することになっており、46 号以降は新しいプラットフォームからの公開となる予定です。ただし、どの時点でどのプラットフォームに移行するかは現時点では未定です (念のため申し添えておきますが、これまでに CiNii で電子化され公開されているアーカイブはそのまま移行先に引き継がれるとのことです)。

### 2. 新事務局より

2015 年 4 月から 3 年間、事務局が早稲田大学に置かれます。連絡先は次のとおりです。

〒162-8644 東京都新宿区戸山 1-24-1

早稲田大学文学学術院 酒井智宏研究室内  
日本フランス語学会事務局

belf-bureau@list.waseda.jp

これまで複数の編集委員が勤務する大学が事務局を務めるのが通例でしたが、現在ではそのような大学はほとんどなくなりましたので、今回、編集委員が一人しかいない早稲田大学で事務局をお引き受けする運びとなりました。例会も早稲田大学で行われていますので、いろいろなことが一箇所に集中するのはいかがなものかと思いましたが、いわゆる雑務が比較的少ない大学が諸業務をお引き受けするのが効率的であろうと判断いたしました。

ただ、早稲田と言えども楽なことばかりではなく、2016 年 4 月からは、早稲田大学に専任教員として勤務する日本フランス語学会会員が一人だけになります。また、酒井は 2014 年 9 月から 2016 年 9 月まで学内役職者 (文学学術院長補佐および文化構想学部教務主任学生副担当) を務めます。

こうした事態に対応するべく、新事務局業務を酒井 (早稲田大学) と守田貴弘 (東洋大学) の 2 名で分担します。新事務局の所在地に守田さんのお名前は現れませんが、実際には守田さんのご協力あつての事務局であることを強調しておきたいと思います。

会費の徴収は基本的に郵便振替で行います。『フランス語学研究』に同封します振り込み用紙で会費を速やかにお払いくださるようお願いいたします。3 年以上にわたって会費納入が滞っている場合は会員資格が停止され、『フランス語学研究』は送付されなくなりますのでご注意ください。

入会の申し込みや事務局へのお問い合わせは、上記事務局のメールアドレス宛にお送りください。

どうぞよろしく願いいたします。(酒井智宏)

### 3. 前年度編集責任者より

編集責任者として、『フランス語学研究』49 号を無事に会員の皆様のお手元に届けることができ安堵しています (実はこの原稿を書いている時点では、再校を印刷所に戻した段階で、まだ学会誌は出来上がっていないのですが…) 本学会は専従職員もおらず、編集委員が手弁当で運営に当たっていますが、学会誌の刊行は例会と並んで本学会の最も重要な活動です。今年も投稿原稿の査読や校正に多くの方々の協力を得ることができました。この場を借りてお礼申し上げます。

投稿原稿は昨年 11 月末に集まり、12 月の編集委員会で査読の担当が決まります。査読を担当する編集委員は、年末の忙しい時期に原稿を読みます。1 月初め、まだ屠蘇気分も抜けない頃に開かれる査読会議で掲載原稿が決まりますが、掲載が決まった原稿にも編集委員から多くの意見が付きまします。いわゆるピア・レビューによるコメントです。今回の原稿の中には数ページにわたるコメントが付いたものもありましたが、コメントは原稿の質を高めるために不可欠なものです。投稿した会員は、

コメントを参考にして原稿を書き直し、再提出された原稿が入稿原稿になります。特にまだ勉強の途中である大学院生の人には、このプロセスがよい経験になるでしょう。

編集責任者は季節労働者で、12月になるまでほとんど仕事がありません。師走の声を聞くあたりから忙しくなり、編集委員会と査読会議を開き、査読会議の結果を投稿者に送付し、書き直した原稿を割り付けて印刷所に入れなくてはなりません。私の勤務する大学では、ちょうどその頃に、後期末試験、卒論・修士論文の審査、博士論文の審査、大学院入試、学部入試と、立て続けに行事があり、学会誌の編集作業と時期が重なるので非常に忙しい思いをします。自分でもよく乗り切れたと思うことがあります。

昔は5月末の日本フランス語フランス文学会春季大会と同時期に例会を開いていて、そこで学会誌を会員に手渡ししていましたが、学会誌の完成をこの時期に合わせるにしました。しかし数年前からこの方式を改めて、メール便などで送るようにしたため、必ずしも学会誌をこの時期までに作る必要はなくなっていました。そこで今年は編集作業に時間的余裕をとるために、出来上りを少し遅らせることにしました。会員のなかには今年は学会誌の到着が遅いと感じておられた方もいらっしゃるかもしれません。少し時間の余裕を持たせて入念な作業ができるようにするためですので、ご理解いただくようお願いいたします。

次号は50号になります。『フランス語学研究』が半世紀を迎えることに感慨を覚えるのは私ひとりではありません。今後とも本誌が質の高いフランス語学研究の発表の場であり続けることができるよう、会員各位のご理解とご協力をお願いします。(東郷雄二)

#### 4. 新編集委員より

##### ◆秋廣尚恵(東京外国語大学)

今年度から編集委員をさせて頂くことになりました。東京外国語大学の秋廣尚恵です。フランス語学会に初めて足を運んだのは、修士1年生のことでした。研究会に参加しながら、いろいろな先生方や院生の方に出会い、様々な刺激やアドバイスを受ける機会を得られたことはとても有益でした。フランス語学会がそのような場として今後も機能していくために微力ながら尽力したいと思います。ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。1999年に渡仏し、今は亡きC. Blanche-Benvenisteの指導で話し言葉における動詞価の研究に取り組みました。動詞価の問題は今後も追いかけていくつもりですが、今は少し気分を変えて、従属節の問題を研究しています。発話や談話を組み立てている一つ一つの要素のステータスを見極め、要素間の結びつきのあり方をマイクロ統語論とマクロ統語論の双方のレベルで明らかにしたいという点で、動詞価研究も従属節研究も同じ方向性にあります。また、長きに渡るフランスでの生活の中で得た最も貴重な経験はフランス語の多様性や複雑さの中に飛び込むことが出来たということです。その多様性を記述する必要性を切実に感じ、その基盤となるコーパス作成や分析の作業にしばらく前から取り組んでいます。データの観察

や処理の過程から学ぶことは多く面白い作業です。外国人には荷の重い仕事で、満足できる結果には至っていませんが、今後も多くの同僚やフランス人研究者と協力しつつ、もっと良質なコーパスを提供できるよう取り組んでいきたいと思えます。

##### ◆山本大地(福岡大学)

2015年度より編集委員に加えていただくことになりました。フランス語学会との最初の接点は、フランス語学研究の25号、30号、31号を入手したときでした。学部三年のときの授業がきっかけでフランス語学に興味をもち、相談した先生からいただいたのがこの三冊です。当時とにかく何度も読み返したのでぼろぼろになっていますが、この三号にはとりわけ愛着があります。時を経て自分がその編集委員のメンバーに加えていただけたとは思いませんでした。例会発表の前はいつも「論をまったく受け入れてもらえなかったら…」という不安と「面白いと思ってもらえたら…」という期待が入り混じった複雑な心境です。しかし思い込みによって言語事実に合わない仮説を立てることが多い私にとって、例会発表はそんな誤りに気づかせてもらえる貴重な場です。現在、形容詞に関心があり、品質形容詞と関係形容詞という分類にうまく収まらないとされる形容詞に注目しています。近頃は罵りや悪態語に使われる言葉を扱うことが多く、人格が疑われているんじゃないだろうかとちょっと心配です。もちろん日常生活では人を罵ることなく平穏な日々を過ごしております。研究と直接関係ありませんが、一年半ほどベルギーに住んでいたため *belgicisme* にも興味をもっています。ベルギーでは前のビールが終わっていない状態で、次のもう一杯が来てしまうと « *Pas de charrette.* » (荷車は駄目) と言われます。「二杯あるから一杯を空ける」という意味のようです。編集委員の仕事も、荷車状態にならないよう着実に覚えていきたいと思っています。どうぞよろしくお願ひいたします。

#### 5. 本年度編集責任者より

歴代の編集責任者および編集委員の方々のおちからで、毎号充実した研究成果が報告されてきた本誌も、次号で記念すべき第50号の発刊となります。そのような重要な号の責任者としてわたしの番がまわってきってしまったことに、まったくの偶然とはいえ、責任のおもさを実感しないではおれません。また、まったくの私事で恐縮ですが、わたし自身が今年で50歳となり、本誌がうちたててきた歴史と伝統をおもうと、おなじだけ生きてきた自分の成長のなさに辟易とせざるをえません。そんな自分自身はともかく、せめて本誌50号は、日本のフランス語研究専門誌として、その記念碑的な1冊となるよう、できうるかぎりの努力をさせていただき所存です。

「フランス語学」とは、このようによばれる独自の学問体系というよりは、言語を科学的に研究する「言語学」ひいては「言語科学」のなかで、フランス語をその研究対象とするものであるとわたしは理解しています。本誌は、時制や名詞句限定、構文、そしてその周辺領域についての詳細・緻密な研究で、きわめてレベルのたかい成果をもたらしてきた学術誌であるとおもいます。その一方で、あつかわれる研究テーマがこのように先鋭化して

きたことで、「フランス語学」にふくまれるはずのもっと多様な研究についての議論が若干しくくなっているというのも現実ではないでしょうか。本誌が「フランス語学」に専門化した日本で唯一の学術誌であることをかんがえると、フランス語にかかわる研究をおこなうもっと多様なタイプの研究にその門戸がひろげられることも、この50号という節目にかんがえてもよいことかもしれません。

前編集責任者の東郷氏が本ニューズレター前号でもかかっているように、諸事情から、今後本学会の会員数も減少することがほぼ確実なこととして予想されます。そのような状況を考慮すれば、フランス語に対してさまざまな観点から関心をよせる研究者たちが、さらに自由に議論ができる場としてのやくわりをはたしてゆくというのも、本誌がめざすべき方向のひとつではないかとおもいます。

ところで、本学会では数年まえより「研究促進プログラム」が導入され、ゆるやかな共通のテーマのもと、BELF「本家」に対するオルターナティブともいえる研究も活発におこなわれるようになりました。このようなくがき今後本誌そのものにも反映されてゆく、その先鞭になるような号にできないものかとおもいつつ、編集委員のみなさんとはなしあいながら、すばらしいといっただけの号にしたいとおもっております。会員のみなさまには、どうかふるって、自由な観点から、多様なテーマでご投稿いただければさいわいです。

(大久保朝憲)

## 6. 運営・企画担当より

今年の3月、東京大学教養学部の卒業式で石井洋二郎学部長はニーチェの『ツァラトゥストラ』から「きみは、きみ自身の炎のなかで、自分を焼きつくそうと欲しくなくてはならない。きみがまず灰になっていなかったら、どうしてきみは新しくなることができよう」という箇所を引用されました。卒業式という場でありながら、「私が仕掛けた最後の冗談かもしれない」と、本当に正しい引用かどうかを確認するように求めるユーモアは真似できないものですし、卒業生に贈ることば自体としても非常に心に残るものです。同時に、この挨拶がニュースで話題になったとき、自分自身に問いかけられているような気がした人も少なくないのではないのでしょうか。少なくとも、私にとっては耳の痛いことばでした。

自分は新しくなろうとしているのか。首尾よく大学に就職できたくらいで、新しいことに挑戦しようという気持ちを持ってしまっていないか。そのように問われている気がしました。

ここ数年の間に、今までやってきた言語学というものに対する興味が急速に失せていきました。もちろん言語学が悪いわけではない。問題は自分のやってきたことの中にある。しかし、どうすればかつて夢中で博士論文を書いていた頃のような喜びが戻ってくるのかが分からない。打開するための決定打が打てないまま、過去の延長で論文だけはできるだけ書こうとして、研究者としての格好だけはつけようとする…そのような悪循環に陥っているのではないかという不安に苛まれ、自分が何を求め

ているのかもはっきりとは分からない。これではちっとも新しくなろうとしていないじゃないか。自分は何を本当におもしろいと思ひ、何に情熱を傾ける人間だったのか。それを知るためにも、何か行動を起こさなければならぬ。

そのような思いを抱えていたとき、酒井さんとの相談により、今年度のシンポジウムは私が企画を引き受けることになりました。選んだテーマは「言語の進化とコミュニケーション」。「フランス語学会にふさわしいテーマではない」というお叱りを受けそうであり、ほとんど門外漢である私が話に加わるには無謀なテーマでもあります。しかし、現時点で自分が心からおもしろいと思えるものをテーマにしたいという欲望に抗うことはできませんでした。結局、必死で書いた企画の文章を見て、私のような下っ端が声をかけるには恐れ多い藤田耕司先生と岡ノ谷一夫先生が優しくも参加して下さることになりました。

果たして私はうまく自分を焼きつくすことができるでしょうか。この原稿を書いているシンポジウム前の段階では、どのような会になるものなのか、想像もつきません。ひょっとしたら新しくなるために灰になるのではなく、再生不可能なまでに無様な丸焦げになっているだけなのかもしれません。それでも、先に進むためにはやってみるしかありません。たとえ残念な姿をさらすことになったとしても、そこで何かを得ることができれば、必ず新しい道が拓けるだろうと期待して。そして、このような個人的な思いも含んだシンポジウムのテーマに対して、一人でも多くの人がおもしろいと共感してくれることを願って。

近年、企画・運営担当としては例会発表の枠が埋まるかどうかという点が非常に気になっていましたし、発表者の顔ぶれが固定されてしまうことも恐れています。本年度は幸い研究促進プログラムも走り出したことからさまざまな発表者に手を挙げて頂いていますが、まだすべての発表枠が埋まっているわけではありません。若手も、かつて若手だった人も、自分がおもしろいと思えるものを信じて、例会の場で自分をさらけ出してみてください。研究活動は学問に貢献する営みであることはもちろんですが、「自分はこのようなものをおもしろいと思う人間なのだ」と表明することでもあるはずですから。

誰もが新しくなるために発表できる場。そんな場となることを目指して運営の業務にあたっていきたいと思ひます。  
(守田貴弘)

## 7. 例会予定

日本フランス語学会では、毎年4月から12月まで(7月と8月を除く)月一回、原則として土曜日15時から18時に例会を開いています。一回の例会では通常二人の方が研究発表を行います。

例会案内はホームページによる他、メーリングリスト frenchling でも流しています。

例会はフランス語学会の会員以外の方でも、自由に来聴することができます。入場も無料です。みなさまのご参加をお待ちしております。

会場：早稲田大学文学学術院 (戸山キャンパス)  
アクセス：  
地下鉄東京メトロ 東西線 早稲田駅 徒歩 3 分  
副都心線 西早稲田駅 徒歩 12 分  
JR 山手線/西武新宿線 高田馬場駅 徒歩 20 分

発表のご希望やその他例会に関するお問い合わせ：  
酒井智宏 (例会運営担当 / 早稲田大学文学学術院)  
t-sakai@waseda.jp

以下はニューズレター編集段階の 4 月 30 日現在の予定です。最新の予定は学会ホームページで確認してください。

第 300 回例会 2015 年 6 月 20 日 (土) 15:00-18:00

会場：早稲田大学文学学術院 (戸山キャンパス)  
33 号館 16 階第 10 会議室

(1) 小川 彩子 (関西学院大学大学院)

「Il y a Y qui + V 構文と X avoir Y qui + V 構文の働き—<名詞句(Y) + qui + 動詞句>型の表現の分析を通じて—」(仮題)

(2) 安齋 有紀 (島根大学)

「自然対話における発話主体間の対話調整」(仮題)

司会: 酒井 智宏 (早稲田大学)

第 301 回例会 2015 年 9 月 26 日 (土) 15:00-18:00

会場：早稲田大学文学学術院 (戸山キャンパス)  
33 号館 16 階第 10 会議室

(1) 長沼 剛史 (京都大学大学院)

「発表題目未定」

(2) 近藤 野里 (東京外国語大学大学院)

「発表題目未定」

司会: 守田 貴弘 (東洋大学)

第 302 回例会 2015 年 10 月 17 日 (土) 15:00-18:00

会場：早稲田大学文学学術院 (戸山キャンパス)  
33 号館低層棟 6 階第 11 会議室

[※通常の会議室と異なりますのでご注意ください。33 号館 1 階奥のエレベーターをご利用ください。33 号館手前のエレベーターは 6 階には停まりません。]

(1) プョ・パティスト (筑波大学大学院)

「発表題目未定」

(2) 三浦 龍介 (青山学院大学大学院)

「発表題目未定」

司会: 酒井 智宏 (早稲田大学)

第 303 回例会 2015 年 11 月 7 日 (土) 15:00-18:00

会場：早稲田大学文学学術院 (戸山キャンパス)

(1) 本間 幸代 (国際学院埼玉短期大学非常勤)

「発表題目未定」

(2) 発表者未定

司会: 守田 貴弘 (東洋大学)

第 304 回例会 2015 年 12 月 5 日 (土) 15:00-18:00

会場：早稲田大学文学学術院 (戸山キャンパス)

(1) 発表者未定

(2) 発表者未定

司会: 酒井 智宏 (早稲田大学)

## 8. 談話会予定

今年は「視点」をテーマに談話会を開催します。なお、以下の情報は 4 月現在のものです。最新の情報は学会ホームページにてご確認ください。

開催日時：7 月 18 日 (土) 15 時～18 時

会場：未定

発表者：

- ・小熊和郎 (西南学院大学) 発表タイトル未定
- ・本多啓 (神戸市外国語大学) 発表タイトル未定
- ・西田谷洋 (富山大学) 発表タイトル未定

多数の方々のご参加をおまちしております。

(須藤佳子・田原いづみ)

## 9. 研究促進プログラム

このニューズレターの前号で参加募集のお知らせを申し上げました第 2 次研究促進プログラムは、おかげさまで順調に開始され、進行しております。以下にこれまでの経過を時系列にそってご報告いたします。

(1) 2014 年 7 月、下記の方々 (敬称略) が参加者として決定しました。各自の研究課題をあわせて示します。

・秋廣尚恵 (東京外国語大学) 「話し言葉における従統詞の研究」

・安齋有紀 (島根大学) 「自然対話における発話主体間の対話調整」

・江川記世子 (大阪大学非常勤講師) 「現代フランス語における単純過去の観察」

・藤村逸子 (名古屋大学) 「大規模コーパスに基づく名詞と形容詞の使用パターンとその構造化に関する研究」

・伊藤達也 (名古屋外国語大学) « Marqueurs discursifs / particules énonciatives / coordonnants » (談話標識の意味論的分類の試み)

・川島浩一郎 (福岡大学) 「メトニミ・メタファと区別の解消」

・木島愛 (新潟大学非常勤講師) 「視覚動詞を用いる定表現に関する研究」

・古賀健太郎 (東京外国語大学大学院) 「ネット社会の現代におけるフランス語複合名詞の形成：[N1 + N2] 型を中心に」

・近藤野里 (参加決定当時：東京外国語大学大学院 / 2015 年 4 月より名古屋外国語大学) 「長母音消失と位置の法則の適用範囲の進行」

・西脇沙織 (EHESS PARIS / CRAL 博士課程) 「反語法を用いたアイロニーと誇張法を用いたアイロニー 意味論的ブロック理論による分析」

・小倉博行 (早稲田大学非常勤講師) 「ラテン語の間投詞あるいはそれに準ずる表現の用法について — 歴史語用論的観点から」

・大久保朝憲 (関西大学) 「アイロニーからポライトネス 発話へ：意味論・語用論のインターフェイス」

・大塚陽子 (白百合女子大学) 「フランス語初級テキストにおけるポライトネス — 日本語母語話者学習者の認識」

と理解からみえるもの—」

・酒井智宏 (早稲田大学) « *La dichotomie langue / parole et la modulation pragmatique* » (ラング / パロールと語用論的調整)

・塩田明子 (慶應義塾大学 (他) 非常勤講師 / 2014 年 11 月にプログラム参加を辞退) 「発話の流れの一貫性と時制」

・杉山香織 (西南学院大学) 「日本人フランス語学習者による話し言葉の使用語彙の特徴 —タスクに基づくアクティビティの発話データ分析から—」

・田代雅幸 (筑波大学大学院) 「ディアログにおける *au contraire* の論証的な動きについて」

・渡邊淳也 (筑波大学) 「主語不一致ジェロンディフの文法化と熟語的凝結」

・山本大地 (福岡大学) 「情意形容詞, 法形容詞とその意味の作用域」

(2) メンバー決定直後から 2014 年 9 月にかけて, 各自の研究計画をもとにして相互批評ならびに討議を行いました。

(3) つぎのような研究会を企画・実施しました。

・ **第 1 回研究会** 2014 年 12 月 6 日 (土)

発表:

・大久保朝憲 (関西大学) 「論証的ポリフォニー理論とアイロニー: 「ほめごろし」のディスコースをめぐって」

・藤村逸子 (名古屋大学) 「大規模コーパスにおける言語使用 (*parole*) の観察から推測される「フランス語の規範」と「人間の認知傾向」

司会: 渡邊淳也 (筑波大学)

・ **第 2 回研究会** 2015 年 3 月 8 日 (日)

発表:

・大塚陽子 (白百合女子大学) 「フランス語初級テキストにおける応答に関するポライトネス・ストラテジー」

・江川記世子 (大阪大学非常勤講師) 「単純過去による書き手の事態記述と読み手の解釈」

・秋廣尚恵 (東京外国語大学) 「会話コーパスにおける『理由』を表す従属節 *car, comme, parce que, puisque*」

司会: 大久保朝憲 (関西大学)・酒井智宏 (早稲田大学)

・ **第 3 回研究会@福岡** 2015 年 3 月 10 日 (火)

発表:

・日野真樹子 (西南学院大学非常勤; プログラムのメンバーではありませんが, 今回は発表者として参加くださることになりました) 「談話マーカの *là* について」

・杉山香織 (西南学院大学) 「CEFR 準拠の教科書における *n-grams* の特徴と CEFR-J の記述文の対応」

・山本大地 (福岡大学) 「情意形容詞の情意をめぐって」

・川島浩一郎 (福岡大学) 「メトニミ, メタファと区別の解消」

司会: 川島浩一郎 (福岡大学), 山本大地 (福岡大学)

(4) 今後は 9 月ころまでフランス語学会例会や関連研究会で当プログラムのメンバーが積極的に発表するほか, さらなるプログラム独自の研究会の実施も現在検討中です。

(5) また, 論文執筆・査読のうえ, 来年の『フランス

語学研究』第 50 号発刊と同時期に別冊論文集を発刊することをめざします。

プログラム世話人:

大久保朝憲 (関西大学)・川島浩一郎 (福岡大学)・酒井智宏 (早稲田大学)・渡邊淳也 (筑波大学)

## 10. 各地の研究会だより

### ◆関西フランス語研究会

関西の大学院生と教員が中心になって研究会を開いています。会場は原則的には関西大学ですが, 昨年は都合により大阪なんばにある大阪府立大学のサテライト I-site でもしばしば行いました。昨年の発表は以下の通りです。

4月19日

谷口永里子「フランス語の関係節中の倒置について」

5月17日

津田洋子「〈*voilà*+名詞句+関係節〉構文をめぐって—先行場面とスキーマ化されたシナリオ—」

6月21日

佐々木香理「接頭辞 *RE* の本質的機能—認知動詞の場合—」

7月5日

高橋克欣「*quand* 節に現れる半過去—談話的時制解釈モデルによる分析」

9月20日

木内良行「フランス語使役文における被使役者名詞の表現形式について」

10月11日

東郷雄二「*Il est ... / C'est...* の主語代名詞の使い分けは構文の問題か?」

12月20日

曾我祐典「過去のことを表すときの時制選択のしくみ」

1月24日

川上夏林「フランス語の心理・感覚動詞の意味構造と内的経験の認知パターンについて」

3月14日

佐々木幸太「*se mettre à inf.* で表す開始アスペクト」  
津田洋子「現象文〈*Le facteur qui passe!*〉について—*IL Y A / VOILA* + <名詞句+関係節> との比較をもとに」

この研究会では, 論文や学会発表をひかえる人がその準備のために発表したり, 論文を完成したり学会発表を終えた人がその内容を紹介したりしています。形式にこだわらず, 気軽に意見・情報の交換ができる集まりです。

また、新刊書や論文の紹介、国内外の新しい研究の動向についての紹介や解説なども歓迎します。

平塚徹：hiratuka@cc.kyoto-su.ac.jp

大久保朝憲：tomonori@ipcku.kansai-u.ac.jp

(平塚 徹)

#### ◆東京フランス語学研究会

東京フランス語学研究会は、大学院生など、若手を中心としたフランス語学研究者の気楽な研究発表、議論、交流の場です。多くのかたがたに参加していただきやすいよう、フランス語学会の例会がひらかれる日に、同じ（または近接した）会場で、原則として13時から14時30分まで開催します。フランス語学会例会の会場が変更されるときや、編集委員会などと重なるときは開催せず、年間6回程度の実施を目安とします。

会員資格、発表資格、会費などの制度は設けませんので、関心のあるかたはどなたでも自由に参加、発表していただけます。発表は、フランス語(学)に関係することであれば、どのようなテーマでもかまいません。また、完成された内容である必要もありません。学会発表の前段階にあたるような習作的な発表や、先行研究に対する論評といった形の発表も歓迎します。

昨年度ニューズレター掲載分以降、今年度4月までは、以下のような内容で研究会が開催されました。

第16回研究会 2014年9月27日(土)

発表者：三浦龍介(青山学院大学大学院)

題目：前置詞 *dans* の否定的評価用法について

第17回研究会 2014年10月18日(土)

発表者：大道果南(筑波大学大学院)

題目：談話マーカー *disons* の機能について

第18回研究会 2014年11月8日(土)

発表者：田代雅幸(筑波大学大学院)

題目：*au contraire* をめぐる論証の動きについて

第19回研究会 2015年4月18日(土)

発表者：伊藤達也(名古屋外国語大学)

題目：談話標識の「語用論的」意味にはどのような意味論が必要か？—フランス語の談話標識 *quoi*, *bon*, *voilà* の分析を通じて

4月30日現在、今後の研究会の予定は、つぎのようになっています。

第20回研究会

日時：2015年5月9日(土)13時から14時30分

会場：早稲田大学文学学術院(戸山キャンパス)  
33号館16階第10会議室

発表者：小倉博行(早稲田大学非常勤)

題目：ラテン語の動詞 *obsecro* の語用論的考察

第21回研究会

日時：2015年6月20日(土)13時から14時30分

会場：早稲田大学文学学術院(戸山キャンパス)

33号館16階第10会議室

発表者：隈元 舞(東京大学大学院)

題目：未定

第22回研究会

日時：2015年9月26日(土)13時から14時30分

会場：早稲田大学文学学術院(戸山キャンパス)  
33号館16階第10会議室

発表者：古賀健太郎(東京外国語大学大学院)

題目：未定

第23回研究会

日時：2015年10月17日(土)13時から14時30分

会場：早稲田大学文学学術院(戸山キャンパス)  
33号館6階第11会議室

発表者：未定

第24回研究会

日時：2015年11月7日(土)13時から14時30分

会場：早稲田大学文学学術院(戸山キャンパス)

発表者：未定

発表を希望なさるかたは、下記ホームページの「お問い合わせ」の項目から世話人あてにご連絡ください。最新の予定については、ホームページの「今年度の研究会」の項目でご確認ください。ホームページ上で発表者が未定になっている回については、発表者を募集しております。

東京フランス語学研究会ホームページ：

<http://lftky.jimdo.com/>

(渡邊淳也・塩田明子)

#### 11. 海外情報

留学、または在外研究などでフランス語圏に行っておられる方、または最近行ってこられた方に依頼し、所属大学などでの研究・教育の最新情報を伝えていただくコーナーです。類似の記事を最後に掲載したのは2011年度で、しばらくとだえていましたが、今回から再度、連載にしたいと思います。

#### ◆パリ第8大学

私は2012年10月から2015年2月にかけて、パリ第8大学の博士課程に在籍しました。留学中は、主に東京外国語大学に提出する博士論文の準備および執筆を行いました。私はフランス語の発音の通時的変化に興味を抱き、「リエゾン」と「中舌母音の分布の通時的変化」という2つのテーマについて研究を行っています。パリ第8大学を選んだ理由は、生成理論系の研究者が多い大学であること、また音韻理論をしっかりと学ぶ機会を得たいと考えたためです。パリ第8大学では *École Doctorale cognition langage, interaction* と CNRS 双方に属している SFL (*Structures Formelles du Langage*) という研究所に所属し、Joaquim Brandão de Carvalho 先生に指導していただきました。留学中は SFL で行われている

博士ゼミ、音韻論のアトリエ、また ED で行われている統計の授業に出席しました。特に音韻論のアトリエでは、各回、外部の研究者による発表を聞くことができました。また、SFL の同級生のほとんどが音韻論を専門にしており、それぞれフランス語、ポルトガル語、古典ギリシャ語、韓国語と異なる言語を研究していました。SFL にはやはり、統語論、音韻論を中心に生成理論を研究している研究者が多く所属しています。また、このラボには手話の研究を行っている研究者および大学院生が多く、日本ではあまりなじみがなかった手話についての言語学的研究の発表を聞く機会が多くありました。留学 1 年目にはパリ第 10 大学で行われていたリエゾン研究のアトリエに参加することができました。Sophie Wauquier, Bernard Laks, Jean-Pierre Chevrot といったリエゾン研究者の発表を聴講できたことは、博士論文の執筆に大いに役立ちました。指導教官の Joaquim Brandão de Carvalho 先生とは 2 か月に一度のペースで、主に「中舌母音の分布の通時的変化」についての研究に対して指導いただきました。

留学中には、東京外国語大学に提出する博士論文の調査および執筆を終わらせるために、16 世紀から 18 世紀にかけて出版されたフランス語文法書の調査をフランスで行いたいと考えていました。このため、週の半分はフランス国立図書館に通い、地階にある研究者用の図書館で文法書における発音の説明について調査を行いました。また、留学中は学会発表をすること、国際学会を聴講しに行くことにも重点を置きました。学会発表については、イギリスのケンブリッジ大学で行われた Société Internationale de Diachronie du Français で、19 世紀末に出版された Paul Passy によるフランス語記述におけるリエゾンについて発表を行いました。また、修士の頃から参加してきたフランス語学習者の音声コーパス構築を行っている IPFC プロジェクト (InterPhonologie du Français Contemporain) が毎年 12 月に開催している学会で 2 度研究発表を行いました。2 度目の発表では、フランス語教科書におけるリエゾンについての研究発表を行い、「コーパスの規模を広げて、分析と考察をさらに深めるべきである」というアドバイスをいただき、今後の課題と目標ができたことは嬉しい出来事でした。また、国際学会で思い出深いのは 2014 年夏にベルリン自由大学で行われた Congrès Mondiale de Linguistique Française です。発表こそできなかったものの、フランス語学に限定された大規模な学会に初めて参加し、特定の専門分野に偏らず様々なテーマの研究発表を横断的に聴講することができたことは、自分の研究分野以外の研究にも興味を持つ良いきっかけになりました。帰国後、2015 年 3 月に東京外国語大学に博士論文を提出し、7 月に博士論文の審査を予定しております。(近藤野里)

#### ◆グルノーブル第 3 大学

私は現在、筑波大学 (人文社会科学部) を休学しながら、グルノーブル第 3・スタンダール大学外国語学部東洋言語学科日本語科のレクターとして、日本語教師の仕事をしています。私が担当しているのはリサンスの LEA (Langues étrangères appliquées) と、外国語を専

門としない学生のための外国語学習コース (LANSAD : Langues pour les spécialistes d' autres disciplines) の日本語の授業ですが、この他にも日本語コースとしてマスターの TSM (Traduction spécialisée multilingue), NTCI (Négociateur trilingue en commerce international) があり、毎年 400 人程度の学生が日本語を学んでいます。

このように私は学生としてスタンダール大学に籍を置いているわけではないので、留学に関する情報としてお伝えできることは限られるのですが、先生方のご厚意で聴講させていただいた科目やこちらで開かれている講演会やセミナー、その他グルノーブルでの生活について、少しご紹介したいと思います。

スタンダール大学には文学・演劇、言語学、外国語、コミュニケーションといった分野の学部が設置されています。私は今年、言語学部の Descriptions syntaxiques という Master 2 の授業 (Iva NOVAKOVA 先生) と Syntaxe générale et française という Licence 3 の授業 (Lidia MILADI 先生) に、聴講生として参加させていただきました。前者は 1 つの文法的カテゴリーを取り上げて、フランス語と受講者の母語 (ポルトガル語、ポーランド語、ロシア語、中国語、ペルシャ語、アラビア語、日本語) とでどのような統語的な違いがあるか比較し整理していくという授業、後者はいくつかのフランス語の統語現象を分析しながらその規則について学習していく、どちらかと言えば講義タイプの授業でした。どちらの授業も先生はフランス語母語話者ではなく、フランス語を議論の中心にしながらも、他の言語の中にフランス語を位置づける言語類型論的な視点を持っておられるのがとても印象的でした。

講演会やセミナーも盛んで、言語学、言語教育学、文学、翻訳学、社会言語学といったさまざまな分野の勉強会がたくさん開かれています。トピックの例としては、「Appliquer l'analyse du discours à l'étude des genres professionnels», «La relation texte-image : essai de systématique», «Mise en place une pédagogie actives à travers des échanges en ligne entre étudiants», «Théâtre, chant, CECRL et pédagogie actionnelle», «TAL et langues des signes, un modèle formel spécifique et une approche pour la traduction automatique», «Le picard et le québécois : langues ou dialectes?»などを挙げるすることができます。

広大なキャンパスにはスタンダール大学の他にも、グルノーブル第 1 大学 (理工系) と第 2 大学 (社会科学系)、政治学院、INP (Institut national polytechnique) などが隣接していて、共有されている施設を利用することができます。例えば Bibliothèque universitaire droit-lettres は第 2 大学とスタンダール大学で共有されている大きな図書館で、社会科学系の文献を多く所蔵しています。またこの図書館では講演会なども開かれていて、例えば今年の 2 月には表現の自由に関して法学、哲学、政治学の先生を招いての討論会が行われ、たくさんの学生や職員が参加し議論が交わされていました。

キャンパスは街の中心からトラムで 20 分ぐらい離れたところにあります。緑が豊かでとても気持ちのいい場

所です。グルノーブルは山に囲まれていて、ゆったりとした雰囲気があります。四季によって変化する山の風景も美しいです。このような落ち着いた環境は学業／研究活動に取り組むのに最適だと思います。(津田香織)

## 12. メーリングリスト frenchling からのお知らせ

frenchling はフランス語学関係の情報交換を目的としたメーリングリストです。フランス語学関係の研究会や講演会といった催事の告知、文献の探索、あるいはフランス語そのものについての質問、疑問、そして議論に活用してください。利用にあたっては以下の注意をお守りください。当メーリングリストはフランス語学会と密接な関係にあります。当学会専用のメーリングリストではありません。フランス語学会を含め、特定の学会員だけを対象とした連絡には使用しないでください。逆に学会員以外にも開かれたオープンな会合や呼びかけにはどんどん利用してください。ただし、特定の政治的メッセージを含むもの、営利的な活動、アルバイト募集等の研究・教育と関係のないアナウンスなどはご遠慮ください。フランス語関係の教員の募集に関する情報は流していただいて問題ありません。近年はフランス語に関する質問や議論にはほとんど利用されていないのが残念です。せっかくメーリングリストが存在していますので、もっと気軽に利用していただければ我々としても管理のしがいがあるのですが…

さて frenchling は昨年、それまで利用していました yahoo グループのサービスが終了したため、Google グループサービスに移行しました。このサービスは無料でおかつ広告などがうるさくなく、この種のサービスではもっとも使いやすいかと思われます。Google グループへの移行にあたっては、管理グループの井元さんにお手数をかけました。移行後は問題なく機能しています。移行後の新しい frenchling は g-frenchling@googlegroups.com というアドレスになりました。移行に伴い管理グループのアドレスも変わりました。新規の登録、アドレス変更、あるいは退会の時には直接、新しい管理グループのアドレスまでご連絡ください。メンバー以外の方に登録を勧められる場合も、新しい管理グループのアドレスをお伝えください。新しい管理グループのアドレスは以下の通りです。

g-frenchlingowners@googlegroups.com  
 それでは g-frenchling をどうかご活用ください。  
 (frenchling 管理グループ)

## 13. 2014 年度収支決算報告 (\*)

(単位 円)

収入の部	
会費	764,000
機関誌売上金	91,000
広告収入	88,000
預金利息	561
その他雑収入	0
小計	943,561
前年度繰越金	3,766,000
計	4,709,561

## 支出の部

BELF48 号印刷代金	547,884
BELF49 号編集実費	20,000
ニューズレター印刷代金	19,354
発送費・通信費	122,534
特別発表(講演)謝礼	120,000
人件費	218,170
会場費	0
事務消耗品費	5,732
振込手数料	20,580
ホームページ管理費	7,653
言語系学会連合会費	10,000
小計	1,091,907
次年度繰越金	3,617,654
計	4,709,561

次年度繰越金の内訳は以下のとおり

銀行預金 (三井住友銀行普通預金)	872,074
郵便貯金 (普通)	288,786
(振替)	448,610
銀行預金 (三井住友銀行定期預金)	2,006,412
現金	1,772
計	3,617,654

(\*) 2015 年 3 月 31 日現在の収支決算報告。5 月に開催される編集委員会で会計報告と監査報告がなされ、審議のうえ承認の手続きがとられる。

〒 150-8366

東京都渋谷区渋谷 4-4-25  
 青山学院大学フランス文学科合同研究室  
 日本フランス語学会

## 14. 編集後記

今号のニューズレターは、彙報がもりだくさんなうえに、2011 年を最後にしばらくとだえていた記事(海外情報)も復活させましたので、近年になく密度の濃い号になりました。お伝えするべき実質的な内容が多いのは、たいへんよろこばしいことで、フランス語学会の文運隆盛の徴候であればよいと思っております。来年は本誌 50 号、ならびに別冊で研究促進プログラムの論文集を刊行するという、記念すべき年にあたります。文科省が各大学の人文社会科学系の部局の見なおしを提言するなど、われわれの分野にはあいかわらず逆風がふいていますが、これをはねかえして、研究に邁進したいものです。(渡邊淳也)

♪ ニューズレターのバックナンバーは、日本フランス語学会のホームページで読むことができます。

<http://www.sjlf.org/>